

川島結佳子歌集

『アキレスならば死んでるところ』

(現代短歌社)

オンライン会議のために上半身着替えてわたしケンタウルスのよう

「ケンタウルス」が目を引き。他にも「アルカトラズ刑務所」や、歌集タイトルにもなった「アキレス」など、広汎な語彙が比喩の網を張り、読者を幻惑する。インパクトによって一首を鋭く立ち上がらせる歌風に見える。しかし、一冊全体を通読するとその印象は大きく変わる。

死んだ後つけられたから戒名であろうマンモスの名前
の「ユカ」は
どのような老女に私はなるのだろう押すとふかふかし
ているみかん

「わたし」だけの小さな経験と実感が詠まれた歌群に、鋭さというより円やかさを感じる。一首目、自分と似た名を付けられたマンモス「ユカ」に心を寄せる。題材の奇抜さに反して非常に個人的な歌だ。二首目にも、手の届く範囲の小さな出来事と、実感を詠む意識が表れている。

スチームパンクと思う金属の軸が歯茎へ結合しゆく動
画は

私的な出来事である「歯のインプラント治療」を詠んだ歌が多い。一首単位では鋭い比喩が、一冊を通して読むと小さな「わたし」の内面をありありと浮かび上がらせ、やわらかい存在感を湛える。

(三沢左右)

小田桐夕歌集

『ドッグイヤー』

(六花書林)

「自分の感受性くらい／自分で守れ／ばかものよ」という茨木のり子の詩の一節を強く想起した。この歌集は著者が己の感受性を守るその戦いの痕跡のようである。

くるみパンにゆがんだ胡桃があることのひたむきさを抱へてゆかな

歌集冒頭の歌。歌集がこの歌から口火を切るの暗示的である。彼女自身の生、そして作歌への姿勢が一首に凝縮されている。身近なものへの鋭敏なまなざし。ゆがみをひたむきと捉えるあたたかさ。更に彼女はそのゆがみを「持つ」という距離ではなく「抱へ」という距離で語るのだ。どこまでをつたへたものか透明にあらざる梨をくちに

おしあつ

透明でないということ、中身が見えないということ。梨の一切れから、己の内心を秘することへ想像が飛躍する。生きてゐるあひだの雨の総量を知らないままだ 裸眼で仰ぐ

裸眼で仰ぐ雨から、人生で経験する雨の総量へ思慕を巡らせること。著者の感受性が光る。見えるものの向こうにある見えない事実。それを追い求める力に溢れている。

歌集全体を通して、どの歌にも強い緊張感がある。緩みのない歌たちは著者の感受の力の強さを、そのままに表しているのだろう。

(島本ちひろ)